

独立行政法人国立病院機構仙台医療センター

地域医療連携室



●発行日／令和8年9月●発行／仙台医療センター 仙台市宮城野区宮城野2-11-12 TEL022-293-1111●URL／<https://www.nsmc.hosp.go.jp>

地域医療支援病院運営協議会・夕涼の会 開催



2026年7月22日、江陽グランドホテルにて地域医療支援病院運営協議会が開催されました。亀井尚東北大学病院院長、川本俊輔東北医科薬科大学病院院長、安藤健二郎宮城県医師会会長、福壽岳雄仙台市医師会会長、清治邦章仙台市医師会宮城野ブロック代表幹事、小菅玲仙台歯科医師会会長、齊藤守中嶋病院地域連携室課長、佐藤友昭仙台市消防局救急指導係係長、加藤信一宮城野区民生委員児童委員協議会会長が外部委員として出席してくださいました。江面院長のあいさつに続いて地域医療連携部長新倉より令和7年度の地域医療連携活動の報告と次年度事業計画を提示し、協議されました。ご参加いただいた全ての外部委員の方々より、医療センターの現状に対してのご意見や様々なアドバイスをいただき、たいへん有意義な協議会となりました。

続いて、夕涼の会が開催されました。まず副院長新倉より、地域に選ばれる高度急性期病院であり続けるために医療の質の改善活動を行っていることや顔の見える関係構築のための地域医療連携の取り組みについてお伝えしました。その後館田総合感覚器科部長・地域医療連携室長が座長を務め、循環器内科部長の尾上先生から心アミロイドーシスに対する取り組みについての

講演、総合精神神経科部長の佐久間先生からは最新の不眠症診療についての講演、最後に外傷センター長・整形外科医長の矢部先生からは当院における整形外科診療の現状についての講演がありました。最新情報が詰まっており、参加された地域の先生方にも大変好評でした。続いてこの1年間で新たに部長・医長となった医師17名の紹介がありました。その後は部屋を替えて、江面院長のあいさつで来月に迫ったデミング賞受賞について述べた後に、亀井東北大学病院院長よりご来賓のあいさつを頂戴しました。安藤宮城県医師会会長の乾杯の御発声とともに本格的な意見交換会が始まり、今年も医療センターの全職員は背中に名前の書かれた赤い法被を身に着けての参加となりました。昨年同様にご参加の先生方も職員に声かけやすく、好評だったようです。参加人数も合計で241名となり、これまでで最多となり賑やかな懇親会となりました。多くの地域の先生方と交流することができ、顔の見える関係に一步近づいたようです。期待にこたえられるような病院となるよう改善を続けなければならないと改めて考える機会になりました。ご参加いただいた先生方、ありがとうございました。

(独立行政法人国立病院機構 仙台医療センター 副院長 新倉 仁)



仙台医療センター基本理念

最善の医療を尽くして社会に貢献します。
患者さんにやさしく働きがいのある病院を目指します。

〔基本方針〕

- 1 医療の質の継続的改善
- 2 地域との医療連携と情報共有
- 3 社会のニーズに対応した病院経営
- 4 質の高い医療従事者の育成
- 5 職員の働く環境の改善
- 6 臨床研究の活性化

目次

- ※地域医療支援病院運営協議会・夕涼の会…… 1
- ※第25回みちのくウイルス塾終了御礼 …… 2
- ※各科紹介 整形外科 …… 3
- ※新任部長・医長紹介 …… 4
- ※新登録医紹介 …… 4
- ※編集後記 …… 4



第25回 みちのくウイルス塾終了御礼



ウイルスセンター長 藤 井 豊

7月11日（土）、第25回夏の学校「みちのくウイルス塾」を、当院大講堂で開催しました。当日は講演者5名を含めて75名の外部からの参加者を得て、盛況のうちに終えることができました。演者は、長崎、岡山、つくば、秋田、仙台市内からお越しいただきました。

当日は、江面病院長の開会の挨拶に始まり、最初の講演は、植物、昆虫、真菌という生物界にある障壁を乗り越えて感染するウイルスの話でした。ジャガイモやリンゴに感染して病気を起こす真菌に対し、植物に感染するウイルスがその真菌に感染することで、植物が病気にならない話など、興味深い話でした。会場には大学生、大学院生だけでなく、高校生、中学生などの大勢の若者が参加しており、活発に質問が行われました。2番目の講演は食中毒の話で、細菌性食中毒とウイルス性食中毒の特徴の違いを学んだ後、食品からウイルス遺伝子を抽出する方法を発想する過程を聴くことができました。

お昼休みを挟んだのち、参加者の記念写真撮影を行い、午後の講演が行われました。午後の最初の講演はEBウイルスのエピソームの研究が、がんの染色体外DNAの研究につながっていた話でした。続いてダニが媒介する脳炎ウイルスの講演があり、TBEVは日本では9例しか発生しておらず、9例とも重症化したと考えるのではなく、無症状や軽症の患者が認識されていないと考えるべきだとのお話がありました。

最後の講演はウイロイドの話で、ウイルスとウイロイドの違いの説明があり、蛋白質を持たないRNAが感染し植物に病気を起こす話がされただけでなく、世界でのウイロイド研究者の数は少なく、すぐにでも世界トップの研究者になれそうな刺激的なお話も聞くことができました。

講演が終わった後に、日本ウイルス学会研究教育支援委員会のメンバーによる「おさらいクイズ」が行われ、25問の出題で23問正解が3名、22問正解が4名で、合計7名を表彰しました。それぞれの講演に積極的な質問が行われており、ベストクエスチョン賞の選考は難航しました。最終的には受賞者を1人に絞らず2名を選びました。

講演いただいた先生方には、若者にウイルス学に興味を持ってもらい、将来の学者、研究者を志すきっかけの一つにして欲しいという願いをもって、お忙しい中ご講演をお願いしました。講演内容のスライドと、参加者をお願いして書いてもらう聴講録をHPに掲載を予定しています。終了後に実施したアンケートによると、学生、大学院生も複数回の参加者が多く、来年以降もぜひウイルス塾を開催してほしい、また参加したいという意見が大半でした。

来年の開催も期待されており、皆様のご協力を仰ぎながらぜひ開催したいと考えています。

各科紹介

整形外科

外傷センター長 矢部 裕

■当科の特徴

当院は救急センターを併設しており、一般的な運動器外傷に加え、開放骨折や粉碎骨折などの重症四肢外傷、骨盤外傷、脊椎・脊髄外傷、多発外傷など、幅広い重症外傷を受け入れています。また、総合病院として、さまざまな併存症を有する患者さんにも対応しながら、運動器疾患の診療を行っています。

■診療対象疾患

当科では、脊椎グループと四肢・骨盤外傷グループの2グループに分かれて診療を行っています。

○脊椎グループ

腰椎椎間板ヘルニア、腰部脊柱管狭窄症、頸椎症性脊髄症などの一般的な脊椎疾患に加え、脊椎外傷、脊椎感染症など、幅広い脊椎疾患の診療を行っています。確立された標準的治療を基本としながら、患者さんの身体的負担を軽減し、より安全な治療を実現するため、新たな治療技術を積極的に導入しています。2012年から最小侵襲脊椎固定術、2014年から脊椎内視鏡手術を導入し、2023年からは高齢者の骨粗鬆症性椎体骨折に対する経皮的椎体形成術の適応を拡大するなど、脊椎手術の低侵襲化に取り組んでいます。また、最新のナビゲーションシステムを導入し、手術中に脊椎の位置をリアルタイムに把握しながら骨の掘削やインプラントの設置を行うことで、より正確かつ安全な手術を目指しています。脊椎・脊髄外傷では、患者さんの状態を適切に評価したうえで、可能な限り早期の手術を目指しつつ、手術部と連携し、持続可能な診療体制の構築に努めています。

○四肢・骨盤外傷グループ

一般的な四肢外傷、小児の骨折、高齢者の大腿骨頸部骨折・転子部骨折などに加え、開放骨折、粉碎骨折、骨盤外傷などの重症外傷を積極的に受け入れています。可能な限り早期に手術を行い、早期のADL（日常生活動作）の回復と社会復帰を目標として治療を行っています。特に開放骨折や小児の骨折などでは、来院後早期の手術を行うとともに、必要に応じて創外固定術を積極的に適用しています。軟部組織へのさらなる損傷を抑えながら骨折の安定化を図り、合併症の予防と良好な治療成績を目指しています。

■診療対象外の疾患について

現在、骨軟部腫瘍、肩関節・膝関節の鏡視下手術、変性疾患に対する人工関節手術は行っていません。橈骨遠位端骨折などの手関節外傷については整形外科で診療していますが、手関節より末梢の手の外傷・疾患については形成外科が担当しています。

■外傷センターの設立

当院は救急センターを併設した総合病院であり、仙台医療圏の救急医療を支える役割を担っています。この役割をさらに強化するため、このたび外傷センターを設立しました。頭部外傷や椎骨動脈損傷を伴う脊椎外傷、多発外傷、重度の開放骨折などの重症外傷では、単一の診療科だけでは対応が困難であり、複数診療科による迅速な治療と全身管理が必要となります。外傷センターでは、救急科を中心として、整形外科、形成外科、脳神経外科、麻酔科などの関係診療科が連携し、重症外傷患者さんに対して迅速かつ包括的な診療を提供できる体制の構築を目指します。

■当科スタッフ

昨年度は5名体制でしたが、本年度は7名体制となり、診療体制を強化しています。

ふりがな 名前	卒業年	職名	専門分野	専門医資格等
やべ ゆたか 矢部 裕	2002	外傷 センター長 医長	脊椎外科	東北大学医学部臨床准教授 日本専門医機構整形外科専門医 日本整形外科学会脊椎脊髄病医 日本脊椎脊髄病学会認定脊椎脊髄外科 専門医・指導医・評議員 日本医師会認定産業医 日本スポーツ協会認定スポーツドクター
おおやなぎ たく 大柳 琢	2009	医師	外傷整形外科	
むらかみ だいし 村上 大史	2013	医師	脊椎外科	日本専門医機構整形外科専門医
しみず げんた 清水 源太	2018	医師	整形外科一般	日本専門医機構整形外科専門医
ちば だいすけ 千葉 大介	2020	医師	脊椎外科	日本専門医機構整形外科専門医
あべ りょうた 阿部 凌太	2023	医師	整形外科一般	
まつまえ のりこ 松前 範彦	2023	医師	整形外科一般	

■診療実績

手術件数：総数514件（2025年1月～12月）

●脊椎手術 150件

脊椎・脊髄外傷 37件

●四肢・骨盤手術 364件

開放骨折 28件

骨盤倫・寛骨臼骨折 12件

■地域の先生方へ

当科では、一般的な運動器疾患から重症外傷、脊椎疾患まで幅広い診療を行っており、さまざまな併存症を有する患者さんにも対応可能な診療体制を整えています。特に、手術を中心とした治療が望ましい患者さんについては、ぜひご紹介いただければ幸いです。仙台市内の他の医療機関と同様、当院も入院・手術治療を中心とした診療を行っています。病床の状況が許す限り、地域の先生方からご紹介いただいた患者さんを可能な限りお引き受けし、ご期待にお応えできるよう努めてまいります。治療後に症状が安定した患者さんについては、地域の先生方へ逆紹介させていただき、薬物療法や理学療法などの継続診療をお願いしています。超高齢社会を迎えたわが国では、健康寿命の延伸が今後ますます重要な課題となります。そのためには、急性期医療を担う当院と地域の先生方との継続的な連携が不可欠です。今後も地域の医療機関と緊密に連携し、患者さんにとってより良い医療を提供できるよう努めてまいります。引き続き、ご紹介・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



新任部長・医長紹介



消化器内科部長

た なべ のぶかず
田邊 暢一

- 医学部卒業年…1991年(平成3年)
- 出身地…宮城県仙台市
- 出身大学…東北大学
- 専門領域…肝臓、門脈圧亢進症、慢性肝疾患

●抱負

平成3年に東北大学を卒業後、仙台市立病院（五橋時代）での初期研修を経て、平成5年に東北大学消化器内科に入局。平成14年より当院消化器内科に勤務し25年目を迎えましたが、本年6月より消化器内科部長を拝命いたしました。得意領域は肝疾患のIVR治療です。登録医の皆様と二人三脚で地域医療に貢献したいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



脳血管診療部長

さ と う けんいち
佐藤 健一

- 医学部卒業年…1998年
- 出身地…福島県東白川郡棚倉町
- 出身大学…東北大学
- 専門領域…脳神経外科

●抱負

脳血管には、脳に血液を循環させる「パイプ」という側面と、それ自体が増殖や退縮を繰り返す「臓器」という側面があります。脳動脈系は出生時にはほぼ完成し、成長の過程で一部が退縮することがあります。脳静脈系が完成するには生後1年ほどかかりますし、その後の改変のバリエーションは脳動脈系の比ではありません。脳血管治療の本質は必要十分な脳血液循環を確保しつつ、臓器としての変化を正しい方向へ導くことだと思います。



外傷センター長

や べ ゆたか
矢部 裕

- 医学部卒業年…2002年(平成14年)
- 出身地…宮城県仙台市
- 出身大学…北海道大学
- 専門領域…脊椎外科

●抱負

当院は救急センターを併設する総合病院として、これまでも重症四肢外傷、骨盤外傷、脊椎・脊髄外傷などの重症外傷患者を受け入れてまいりました。この機能をさらに充実させるため、救急科を中心に関係各科との連携を強化することを目的として、このたび外傷センターを設立いたしました。今後も仙台医療圏における救急・外傷医療のさらなる発展に貢献できるよう尽力してまいります。何卒よろしくお願いいたします。

新登録医紹介

(令和8年5月31日現在の登録医数 1,681名)

氏 名	住 所	所属名	専 攻
宇根岡 慧	宮城野区福室2-6-24	いのうえ小児科アレルギー科	小児科・アレルギー科
菅原 康太	若林区木ノ下3-16-21 薬師堂ATTRA2階	医療法人黎明会 薬師堂すがわら歯科	歯科
鈴木 悠	青葉区昭和町5-46 大野ビル1F	北仙台ゆう腎泌尿器クリニック	泌尿器科・腎臓内科
花田 順子	泉区南光台3丁目18-1	医療法人社団貢睦会 花田皮膚科	皮膚科
松本 明里	若林区荒井東2丁目12-7	社会福祉法人杜の里福祉会 杜の里内科クリニック	内科・腎臓内科

編集後記

少しずつ秋の気配を感じる季節になりました。皆様はいかがお過ごしでしょうか。
秋といえばスポーツですが、現在高校2年生の息子は小学校から野球を始めて今年で9年になります。毎日の朝早くからの弁当作りや、泥だらけのユニフォームの洗濯、そして週末には遠方へ送迎や試合の応援へ出かける日々を送っています。振り返ってみると、この9年間はあっという間でした。
あと1年足らずで、高校生活最後の野球のシーズンを迎えます。息子は幸いにも先輩や仲間にも恵まれ、楽しく野球を続けることができています。私自身、気持ちに余裕がない時には「なぜこんなに大変なのだろう」と感じることもありましたが、今は息子とともに過ごせるこの時間の大切さをしみじみと感じています。
残りわずかとなった高校野球生活が実り多いものとなるよう、これからも息子の大好きな野球を精一杯応援していきたいと思います。(M・S)

仙台医療センター地域医療連携室より 編集委員

新倉 仁 舘田 勝 犬上 直美 阿部 直美 沖 梨沙

小倉 美緒 工藤 千春 須田 剛 加藤 知巳 菅野 龍二 峯田 真衣 佐藤 華絵 岩渕 由香

<地域医療連携室 直通電話 022-293-1118>